3. 友人と弟子による補筆

クリストフ・ヴォルフ「モーツァルトの《レクイエム》ーー事実とフィクション」より

1791	12月27日	アイブラーは未亡人 <mark>コンスタンツェ</mark> から、完成させるためにスコアを受け取った					
1792		アイブラーが断念した後ジュスマイヤーに依頼し、ジュスマイヤーが補筆・完成させた					
		コンスタンツェは出来上がったスコアを依頼者に渡し、謝礼の残りを受け取った (ただし曲がモーツァルトによっては完成されなかったことは知らせずに)					
1793	1月2日	コンスタンツェとその子供たちのためのチャリティ・コンサートの形でヴィーンにおいて事実上の初演					
		ヴァルゼック伯爵夫人を記念したレクイエムの礼拝における演奏が、ヴィーナー・ノイシュタットで行われた 指揮は伯爵が、「ヴァルゼック伯爵作曲の《レクイエム》」と題されたスコアから行った					
1800		ライプツィヒの音楽出版社、ブライトコップフ・ウント・ヘルテルが1800年に《レクイエム》を初出版した際に、以下のことが明らかになった					
		①フランツ・フォン・ヴァルゼック伯爵が著作権を主張 ②ジュスマイヤーが自分が作品の完成者であると名乗り出た					



ョーゼフ・レーオポルト・アイブラー (Eybler, Joseph Leopold, 1765-1846)

《コシ・ファン・トゥッテ》K.588の初演のための練習を手伝い、モーツァルトの親友となった。 [中略] A.サリエーリの後任としてヴィーンの宮廷楽長となった。1833年、モーツァルトの《レクイエム》の指揮中に卒中の発作を起こし、辞任させられた。 「モーツァルト大事典 より]



フランツ・クサーヴァー・ジュスマイヤー

(Sussmayr, Franz Xaver, 1766-1803)

モーツァルト、のちにA.サリエーリから作曲を学ぶ。オペラ作曲家として成功し、1794年から終生ヴィーンの国立劇場で仕事をした。《皇帝ティートの慈悲》K.621の簡単なレチタティーヴォの作曲でモーツァルトの手伝いをし、モーツァルトが死んだため未完で残された《レクイエム》K.626と《ホルン協奏曲ニ長調》K.412+K.514(386b)を完成。[モーツァルト大事典より]

				,
モーツァルトが	補筆	創作	転用	
音いた砂刀				

アイブラーによる補筆

イントゥロイトゥス セクエンツィア オフェルトリウム コンムニオ ラクリモサ キリエーディエス・イレイ ドミネ・イエズ サンクトゥス ベネディクトゥス アニュス・デイ ルックス・ レクイエム 最初の 残りの部分 コンフタティス ホスティアス エテルナ 8小節 声楽パート 低音楽器 その他楽器 (オーケストレーション)

「セクエンツィア」のオーケストレーションをほとんど完成させはしたが、「ラクリモーザ」の続きを作曲することは、尊敬と畏怖の念からできなかったようで、10個ほどの音符をソプラノ・パートに付け加えただけで断念し、その仕事はジュスマイヤーに移った。

[ニューグローヴ世界音楽大事典より]

ジュスマイヤー版 (ジュスマイヤーによって補筆・完成された版)

声楽パート 低音楽器 その他楽器 (オーケストレーション)

	イントゥロイトゥス		セクエンツィア		オフェルトリウム				コンムニオ	
	レクイエム	キリエ	ディエス・イレ〜 コンフタティス	ラク 最初の 8小節	Jモサ 残りの部分	ドミネ・イエズ ホスティアス	サンクトゥス	ベネディクトゥス	アニュス・デイ	ルックス・ エテルナ
,)										

Introitus, Kyrieを転用

- ※ジュスマイヤーの手紙より(1800年2月8日「ブライトコプフ宛」)
 - ・モーツァルトは声楽4声部と通奏低音のスコアを〈オッフェルトリウム〉まで完全に書き上げていた。 例外は〈ラクリモサ〉であり、これは「ちりからよみがえる qua resurget ex favilla」という節まで作曲されていた。 オーケストレイションに関しては、随所にモチーフが示されていた。
 - ・自分(ジュースマイヤー)は、「罪ある人がさばかれるjudicandus homo reus」の歌詞のところから《レクイエム》を仕上げた。〈サンクトゥス〉、〈ベネディクトゥス〉、〈アニュス・デイ〉は、自分が新たに作曲した。
 - ・最後に、自分は曲により大きな統一を与えるために、キリエ・フーガをあえて、「主の聖人らとともにcum sanctis tuis |の歌詞で反復した。

クリストフ・ヴォルフ「モーツァルトの《レクイエム》ーー事実とフィクション」より